



インターネット版 第5号(総第10号)

2005 September

目次 contents

就任のご挨拶	Good Morning, You, Library!!	附属図書館長 亀山 郁夫
退任のご挨拶	いまこそ人文学の継承を 使ってみよう!	前附属図書館長 富盛 伸夫
特集	オンラインデータベース& オンラインジャーナル	雑誌情報係
改組にあたって	大学図書館をとりまく環境	情報図書館課長 木村 優
私の1冊	一冊の本との出会い	本学教授 八木 久美子
随筆	私の心に残る図書館	本学教授 渡邊 啓貴
資料紹介	地方志と日用類書 ー上塚氏コレクションから	本学教授 臼井 佐知子
図書館からのお知らせ		
図書館講演会、貴重書展示会開催のお知らせ		
図書館活動日誌		
図書館統計		
編集後記		

「Good Morning, You, Library!!」

－ 附属図書館長就任にあたって－

附属図書館長 亀山 郁夫

明るい木目の扉が開き、エントランスホールに足を踏み入れる。その心地よさは、新キャンパスの数ある施設のなかでも群を抜く贅沢さだ。そこには、美術館にも、コンサートホールにも似た落ち着いた雰囲気が漂っている。2000 年 10 月に生まれたこの図書館をぼくらは大いに誇りとしてよい。しかし、本来、誇りとすべきものは、むろん、蔵書数でも、建物の新しさでもない。

図書館は深い森に似ているという。むろん、紙の原料であるパルプが、木材などの繊維体に由来するということが連想の源にある。たしかに、森の木々が、輪廻転生の末に大小さまざまな長方形へ化身したと空想してみるのも悪くはない。しかし、現実には書架の間を歩きまわっていると、「深い森」の比喩は少し現実離れしているように感じられる。ぼくにはむしろ、書架の棚で頑なに背を向けて眠る本たちが、なにやら共同墓地の石とその下に眠る死者たちのように思えてならないのだ。

ぼくがそんな連想にかられたのはわけがある。かつてニコライ・フォードロフという哲学者の伝記を翻訳したことがあった(『フォードロフ伝』、水声社、1998)。ルミャンツェフ図書館(現ロシア国立図書館)の一司書として生涯を過ごし、人間の「物理的な復活」を夢みつづけた大宗教哲学者、「モスクワのソクラテス」の異名で知られた。その彼が、図書館を死者たちが甦える「不死」の空間と考えていたのだ。キリスト教における「復活」の理念に遡る「不死」の思想は、ドストエフスキーやトルストイらに大きな影響を与えたが、彼自身、「生きた図書館」として持てる力を発揮し、耳の遠い一人の青年を手塩にかけて育て、二十世紀へと送り出した。ソヴィエト・ロケット工学の父ツィオルコフスキーがその

人である。

さて、図書館が、真の意味での森となり、酸素資源となり、死者たちが甦る空間となるのに必要な力とは、何だろうか。それこそは今に生きるぼくたち自身の存在ではなかろうか。本を開くという原始的な行為をとおしてのみ、それは実現可能となる。だから、軽い森林浴のつもりで(爽やかなテルペン類の香を思い出すためにも)、図書館に立ち寄ってほしい。書架の本を一冊手にとり、「おはよう」とやさしく声をかけてほしい。

そして、この死者たちの「甦り」の空間も、グローバル化という空前の情報化時代にあつて大きな変身を迫られることになった。ライバルは、WEB 空間の彼方に生まれつつある電子図書館。進むべき道は、おのれのサバイバルよりむしろコーポレーション。遠い将来、木の図書館がすべて電子化されるときが来るとは思えず、おのずから選別の時が来る。それでも、木と電子の双方の図書館で自分を見失わないようにするには、情報処理の能力が第一に試されることになる。グローバル化の時代には、情報処理の能力こそが、自己発見と同等の重みを持つことになるはずである。

世界のホームページ、ブログはいまや 100 億ページを超えた。その数にどれほど現実的な意味があるのか、ぼくにはわからない。しかしそれでも、情報の重みと総量は、ぼくたちがいまいるこの木の図書館の足元にも及ばない。そうはいえ、グローバル化時代の生活スタイルを無視して、木の図書館は今日の時代を生きのびることはできず、永久に共同墓地のままで終わるかもしれない。そんな危機意識のなかで、図書館は日々、宇宙規模のエンサイクロペディアの創造に向けて、地道な歩みを続けているのである。

「いまこそ人文学の継承を」 ー附属図書館長退任にあたってー

前附属図書館長 富盛 伸夫

世の中こぞって改革論議がやかましく、効率至上主義に異を唱えることがはばかれるような現代ほど大学の存在価値が問われている時代はないであろう。もちろん大学は公共財である以上、ここで生み出される知の公開と成果の社会的還元を怠ってはならないことは当然である。しかし、中・短期的プロジェクトで業績評価の可能な理工系分野に比して定量化や実験的再検証には馴染みにくい人文系分野では、研究教育内容に関する限り達成目標とか達成度評価という尺度をもってはかられるのには抵抗がある。意気揚々と成果を誇る実学志向の研究に囲まれて、私たちの大学を含め人文学の知そのものが一種のアイデンティティー・クライシスに陥っているようにもみえなくもない。いずれ大学の研究理念そのものが社会的「ニーズ」に洗われて存在を危うくするか、あるいは「市場価値」のなくなっていくうちに時限的なプロジェクト生産を約束する出前配達のようなものに堕ちてしまわないだろうか。

ところで、実証科学の有用性が正面に打ちだされる18世紀を前に、フランスの科学者であり哲学者でもあったパスカルは「歴史とか、地理とか、法律とか、言語とか、とりわけ、神学とかいうような…ことがらにおいては、それらについて知りうることはすべて書物に含まれているので、それらの書物に助けを求めることがどうしても必要である。」（前田陽一・由木康訳「真空論序言」『世界の名著』24所収、中央公論社）と、書物＝知の伝統に人文学の基盤を求めている。

本来学問に垣根はないのかもしれないが、自然科学の存在原理とあえて差異化すれば、人文学の存在意義はなにかんずく、人間知の批判的継承と新たな枠組みでの再生産の試みに

あるといえよう。人間の知的能力が言語に集約されていることから明らかなように、知の継承は既存のコトバ・言語記号を再批判することから始まる。科学のもたらした産物としての地球的規模の矛盾が将来にも引きずられれば、いずれ遠からず、人間からの視座を失った自然科学自体のアイデンティティーを人文学に求める時代が来ることになる。有用性と速度が評価基準となりつつある現代の私たちも、いまこそ学問の精髓を書物に探り、かつ、権威とされてきた学説をひとつひとつ疑い、記号概念にあらたな意味付けをおこなう営為を怠ってはならないだろう。これにはあらかじめ設定された目標と手順に従うというより、自分自身の頭で考えることが前提となり、専門領域を超えた多分野の仲間と議論することが必須となり、そして、なによりも膨大な時間が必要となろう。

その真摯な、また贅沢な時間の多くを私は図書館で過ごしたいと思う。



編集注

本文中で紹介されております「前田陽一・由木康訳「真空論序言」『世界の名著』24所収、中央公論社」は当館にて所蔵しております。
（請求記号 A/080/11/24）
興味のある方は、ご一読ください。

特 集

使ってみよう！

オンラインデータベース&オンラインジャーナル

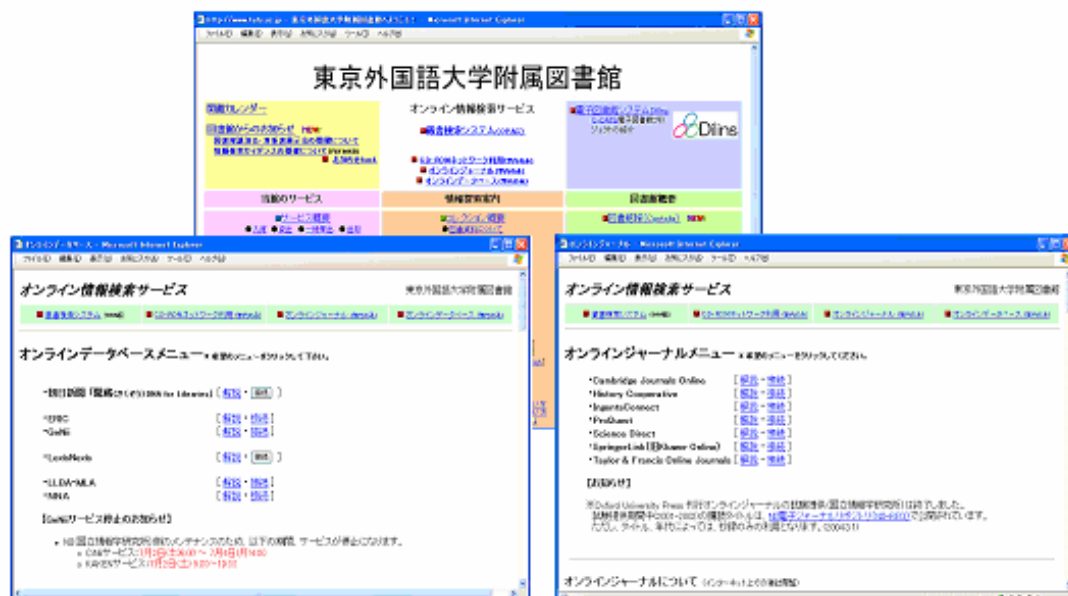
附属図書館雑誌情報係

はじめに

本特集では、本学で利用できるオンラインデータベースやオンラインジャーナルについての簡単な説明と、代表的ないくつかのサービスをご紹介します。

これらのサービスは、研究テーマに関する論文を調べたり、探している論文を読んだりすることができる非常に便利なツールです。情報の更新が頻繁に行われるので、最新の情報が入手できることや、情報源が明らかな信頼性の高い情報を効率よく収集できるメリットがあります。

本学で利用できるオンラインデータベースおよびオンラインジャーナルサイトのリストへは、附属図書館ホームページ(<http://www.tufs.ac.jp/common/library/index-j.html>)からリンクされています。「オンラインデータベース」および「オンラインジャーナル」をクリックするとそれぞれのメニューページが表示されます(図1)。メンテナンスなどでサービスが停止になる場合は、メニューページでお知らせしますので、ご確認ください。なお、原則として、両サービスともに、図書館内をはじめ学内 LAN に接続されているコンピュータからのみ利用可能となっておりますので、ご注意ください。



(図1) 附属図書館 HP (後) および両メニューのトップページ

オンラインデータベースについて

図書館が提供しているオンラインデータベースメニューから、インターネットを経由して、どの雑誌の何巻、何号、何頁に誰のどのようなタイトルの記事や論文が掲載されているかを調べることができます。

オンラインデータベースで検索して得られる情報は、記事や論文の書誌事項のみで、パソコンの画面上で本文を読むことはできないものが多いのですが、検索結果からクリックひとつで

記事の全文まで読める朝日新聞「聞蔵（きくぞう）」のようなデータベースもあります。

オンラインデータベースのメニューページには、法律・言語学・教育学などの主題に特化したデータベースと新聞や総合的な学術情報を調べられるデータベースが掲載されています。

GeNii（ジーニィ）学術コンテンツ・ポータル (<http://ge.nii.ac.jp/genii/jsp/index.jsp>)

GeNii 学術コンテンツ・ポータルは、研究に必要な情報を総合的に利用できる入り口となることを目指して、国立情報学研究所が開始したサービスです。以下の4つのデータベースをまとめて、あるいは個別に検索できます。

(1) 論文を探す：CiNii

日本の学術論文を中心にした論文情報を調べる。

(2) 本・雑誌を探す：WebcatPlus

図書・雑誌を検索し、所蔵している大学図書館等を調べる。

(3) 研究課題・成果を探す：KAKEN

科学研究費補助金により行われた研究に関して、採択課題と研究成果の概要を調べる。

(4) 分野別専門情報を探す：NII-DBR

複数の専門的なデータベースを一括してあるいは個別に検索する。

詳しくは **GeNii** のページでご確認ください。

アクセス方法は、オンラインデータベースメニューの中から **GeNii** の「接続」をクリックすると、接続先の画面（図 2-1）が表示されます。「まとめて検索」欄にキーワードなどを入力し、検索ボタンをクリックすると検索結果が表示されます（図 2-2）。この検索結果表示画面の各データベースのロゴの下にヒット件数が表示されます。ヒット件数をクリックすると、各データベースの結果をより詳しく確認できます。

GeNii は、CiNii の有料コンテンツ以外は基本的に無料で、どこからでも利用できますが、学内からは CiNii の有料コンテンツの一部も無料で利用できます。学外から、学内で提供されているサービスと同等のサービスの利用を希望する場合は、各自でサイトライセンス個人 ID を取得する必要があります。



（図 2-1）GeNii の検索画面



（図 2-2）GeNii の検索結果表示画面

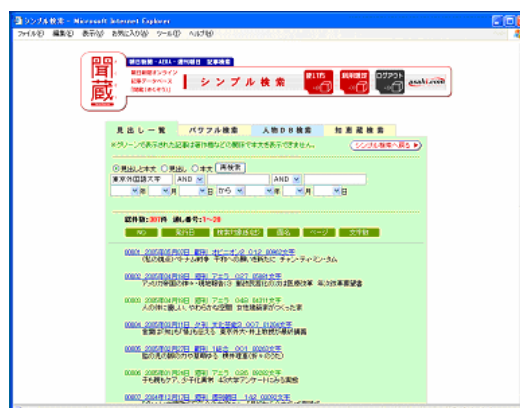
朝日新聞 聞蔵 (きくぞう) DNA for Libraries

朝日新聞 (1984 年以降)、AERA、週刊朝日に掲載された記事約 480 万件 (2005 年 8 月現在) のデータを検索し、本文を閲覧することができます。日付、コラム名、複数の単語の組み合わせ (例えば、「言論の自由は」など) から記事を検索できます。ただし、著作権等の関係で本文を表示できないものが一部あります。

アクセス方法は、オンラインデータベースメニューページから、朝日新聞「聞蔵 DNA for Libraries」の「接続」ボタンをクリックし、セッションの開始の表示の画面からシンプル検索など (人物 DB 検索は利用できません) を選択すると、検索画面が表示されます (図 3-1)。キーワードを入力し、検索開始ボタンをクリックすると検索結果が表示されます (図 3-2)。



(図 3-1) 聞蔵の検索画面



(図 3-2) 聞蔵の検索結果表示画面

オンラインジャーナルについて

オンラインジャーナルは、電子ジャーナル、E-ジャーナルとも呼ばれ、これまで紙に印刷されていた雑誌記事を、電子化して提供しています。電子媒体として利用できるのも、本文の閲覧だけでなく、検索や印刷、ダウンロード、他のコンテンツへのリンクをたどることなどができます。

現在、本学では、約 4,500 タイトルのオンラインジャーナルが利用できます。オンラインジャーナルへのアクセスには、附属図書館ホームページの「オンラインジャーナル」のメニューページからご利用ください。

読みたい雑誌記事へのアクセス方法は、(1) 出版社が提供しているオンラインジャーナルサービスサイトに接続し、データベースをキーワードにより検索して利用する方法と、(2) オンラインジャーナルサービスごとに掲載されている、本学で冊子体でも購入しているタイトルリストからタイトルをクリックして利用する、2つの方法があります。

多くのオンラインジャーナルは、フルテキストが PDF 形式と HTML 形式で提供されています。PDF 形式は、印刷された冊子と同じレイアウト・文字で見ることができます。PDF 形式のファイルを閲覧または印刷するには、Adobe Reader が必要です。Adobe Reader は、Adobe 社のホームページ (<http://www.adobe.co.jp/products/acrobat/readstep2.html>) から無料で入手できます。

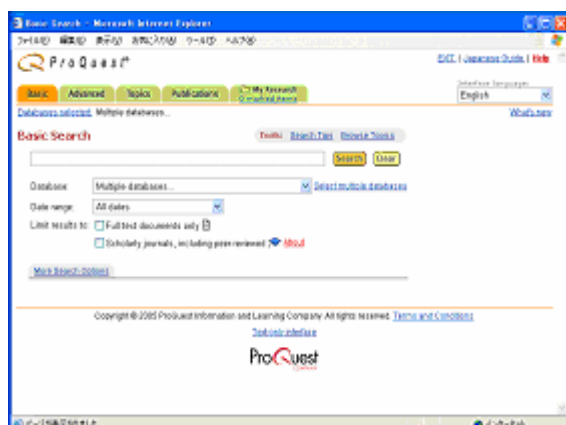
出版社との契約内容によりフルテキストの閲覧ができない場合でも、電子化されている多くの雑誌は、目次、抄録が無料で公開されていますので、論文記事の概要を知るのに利用することができます。

オンラインジャーナルの利用にあたっては、データの複製、第三者への配布および一度に大量のダウンロードは決して行わないでください。

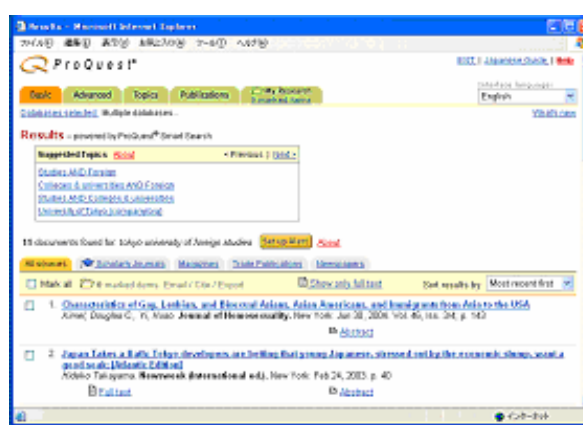
ProQuest (プロクエスト)

ProQuest は、ProQuest Information and Learning 社が提供しているオンラインジャーナルサービスです。複数出版社等の新聞、雑誌および学術誌が入った各種のデータベースで構成されています。本学では、ProQuest のサービスの内、Academic Research Library、ProQuest Newspapers などのサービスを契約しています。Academic Research Library は、人文社会科学から自然科学まで幅広く網羅した総合雑誌全文データベースです。1971 年から現在までをカバーし、3,675 のタイトルの索引と 2,275 のタイトルの全文雑誌を提供しています (2005 年 8 月現在)。また、ProQuest Newspapers では、New York Times (1995 年以降) と USA TODAY (1987 年以降) の新聞記事を検索し、利用することができます。

オンラインジャーナルメニューページから、ProQuest の「接続」をクリックすると、ProQuest のデータベースの選択画面が表示されます。必要なデータベースだけを選択することも可能です。デフォルトでは、すべてのデータベースが検索対象となります。Continue (続行) ボタンをクリックすると基本検索画面に変わります (図 4-1)。検索項目欄にキーワードを入力し、Search (検索) ボタンをクリックすると検索結果が表示されます (図 4-2)。インタフェースを日本語に切り替えることもできます。



(図 4-1) ProQuest の基本検索画面



(図 4-2) ProQuest の検索結果表示画面

おわりに

それぞれのオンラインデータベースやオンラインジャーナルは、収録分野・収録年代・収録件数・更新頻度・検索項目・カスタマイズ機能に違いがあります。オンラインデータベースで学習・研究に必要な論文や記事を検索し、書誌事項を確認して、オンラインジャーナルを利用するなど、それぞれのサービスの機能や特徴を理解することにより、より快適に、よりの確に情報の収集ができます。

学内 LAN に接続されたパソコンからは、時間や場所を問わず利用できますので、学習・研究におおいに活用してください。分からないことなどありましたら、お気軽に附属図書館 2 階カウンターまでお問い合わせください。

本学で利用できる

オンラインデータベース一覧

2005 年 9 月現在

オンラインデータベース名	概要
朝日新聞「聞蔵(きくぞう) DNA for Libraries」	収録範囲 朝日新聞及び AERA、週刊朝日の記事 特記事項 知恵蔵検索も利用できます。 人物 DB 検索は利用できません。
ERIC	収録範囲 教育学関係文献 (雑誌論文、研究報告書、図書) 特記事項 一部の資料については、全文が閲覧できる場合もあります。 学外からも同じサービスが利用できます。
GeNii	収録範囲 CiNii：論文情報ナビゲータ Webcat Plus：図書情報ナビゲータ KAKEN：科学研究費成果公開サービス NII-DBR：学術研究データベース・リポジトリ 特記事項 CiNii では、国内の大学紀要、雑誌等に掲載された論文が検索でき、本文を閲覧することも可能です。 (学外から検索までは可能ですが、本文の閲覧はできません。また、個人利用対象の有料サービスは学内からも利用できません。)
LexisNexis	収録範囲 欧米系の法律文献 特記事項 法律のほか、欧州言語のニュースや新聞、雑誌等の記事も検索及び閲覧ができます。
LLBA・MLA	収録範囲 LLBA：言語学・言語行動学に関する文献 MLA：言語学・文学・民俗学に関する文献 特記事項 両方のデータベースを同時に検索できます。
N N A	収録範囲 アジア・オセアニア・ヨーロッパの各地域の現地経済情報 特記事項 日本語で検索及び記事の閲覧ができます。
SCOPUS	収録範囲 自然・社会科学に関する文献 特記事項 10 月より提供開始予定。

【注意！】

各オンラインデータベースの収録範囲は、本学と提供機関との契約に基づき記載しています。そのため他の大学の説明とは異なる場合があります。ご承知おきください。
 なお、学外からアクセスしても無料で検索及びコンテンツの利用が可能な場合もあります。

本学で利用できる

オンラインジャーナル一覧

2005 年 9 月現在

オンラインジャーナル名	概 要
Cambridge Journals Online	収録分野 人文・社会科学 利用範囲 本学及びコンソーシアム参加館購入分の全文が閲覧できます。
History Cooperative	収録分野 歴史学 利用範囲 本学購入分の全文が閲覧できます。 特記事項 購入していないタイトル、巻号についても、一部、本文の閲覧が可能です。
IngentaConnect	収録分野 全分野 利用範囲 本学購入分の全文が閲覧できます。 特記事項 学外からも検索及び要旨の閲覧が可能です。
ProQuest	収録分野 全分野 利用範囲 3,700 誌以上の記事の検索及び全文の閲覧ができます。
Science Direct	収録分野 自然科学及び社会科学 利用範囲 本学及びコンソーシアム参加館購入分の全文が閲覧できます。
SpringerLink	収録分野 人文・社会科学 利用範囲 本学購入分の全文が閲覧できます。 特記事項 その他のタイトルについては、要旨の閲覧が可能です。
Taylor & Francis Online Journals	収録分野 人文・社会科学 利用範囲 本学購入分のタイトルについて全文の閲覧ができます。 特記事項 その他のタイトルについては、要旨の閲覧が可能です。

【注意！】

各オンラインジャーナルの分野や範囲は、本学と提供機関との契約に基づき記載しています。そのため他の大学の利用状況とは異なる場合があります。ご承知おきください。なお、学外からアクセスしても無料で検索及びコンテンツの利用が可能な場合もあります。

附属図書館では、10月に情報検索ガイダンスを実施する予定です。興味のある方は、図書館 HP のお知らせや館内の掲示をご確認の上、是非ご参加ください。

「大学図書館をとりまく環境」

—改組にあたって—

情報図書館課長 木 村 優

1. はじめに

国立大学が国立大学法人に移行し2年目となりましたが、大学としての学習・教育・研究の基本的な使命は不変です。同じく大学図書館がそれらの活動を支援するという役割も変わっていません。しかし、本学図書館（以下「図書館」という。）及び大学図書館をとりまく環境は、法人移行のほかインターネットの急速な利用拡大、電子媒体資料の普及、社会からの情報公開の要請等、大きく動いています。

2. 資料の収集・整理・利用

資料の収集・提供も従来とは変化しています。紙媒体資料だけでなく、紙と電子媒体または電子媒体のみで販売・流通する資料も増加しており、検索・利用の簡便さで電子媒体資料が急速に普及しつつあります。本学でも電子ジャーナルを提供しており、今後は理工系分野と同様に、学習・研究に不可欠なものとなると考えています。一方、図書については当分、紙媒体での出版とその比重は変わらないと思われませんが、出版コストの低減のために電子ブックとインターネット配信という形態も学術出版において増加することは十分に予想されます。これらの電子媒体については、これまでのものとしての購入ではなくライセンス契約という形態が一般的にとられており、図書館はこの新たな収集の方法に対応していく必要があります。

資料の利用を促進するために、目録情報の入力と公開が急速に進展しています。図書館でも図書資料の遡及目録入力を進めており、国立情報学研究所(NII)の目録・所在情報サービス (NACSIS-CAT)への本学からの新規書誌入力件数は11,600件（平成16年度）に達し、平成12年度の約5倍となっています。

利用のための電子媒体への変換とWebサーバからの公開も進んでおり、図書館では「史

資料ハブ地域文化研究拠点」と協働で、収集した資料の電子化と公開を電子図書館システム Dilins により行っています。

一方、海外においては、目録情報をWWW検索エンジンであるGoogle等へ提供し、図書館資料へのより多くのアクセスを獲得しようという試みも行われています。

3. 学内からの情報発信

大学は、学内の研究成果を蓄積・発信することにより社会への説明責任を果たすことを求められています。これに応えるため、いくつかの大学図書館では教員の方々の協力を得ながら「学術機関リポジトリ」の構築・公開への取り組みを始めており、北海道大学学術成果コレクション(実験版)もその一つです。

(<http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/index.ja.jsp>)

「学術機関リポジトリ」は、学内刊行物である紀要等に掲載された論文だけでなく、学協会や出版社刊行の学術雑誌に投稿・掲載された論文や教材・実験データ等も含めて、学内外にインターネットを介して公開・提供していこうというものです。

本学においては、学長直属の学術情報室が設けられ、学内の学術情報の蓄積・発信への環境整備を行っています。図書館も学術情報室等の関連組織と連携しながら、学術機関リポジトリの構築に向けた取り組みを進めていく予定です。

4. おわりに

紙媒体と電子媒体のバランスをとりながら学術資料の収集・提供を行い、学生・教職員の方々の学習・教育・研究を支援する図書館機能を強化するため、7月1日に図書館事務部は情報図書館課へ改組されました。今後も、「大学の心臓」としての機能を果たせる図書館となるべく努力していきますので、学内外の方々の一層のご理解とご協力をお願いいたします。

一冊の本との出会い

本学外国語学部教授 八木 久美子

誰にでも、自分の人生を左右するような一冊の本との出会いがあるかと思います。少なくとも私には忘れることのできない一冊の本があります。今、私は宗教研究を専門としていますが、もしもその本と出会わなければ他の道に進んでいたかもしれません。

学生時代、私は古本屋を歩くのが好きでした。古本屋街に行くといつも、帰りの電車賃だけを残してほとんど財布が空になり、もうこれ以上重くて持つことができなくなるまで、本を買っていました。本を読むことが楽しいのはもちろんでしたが、それだけでなく、私は本自体がとても好きでした。本の感触、匂い、時代や作った人の個性を感じさせる装丁などすべてが魅力的でした。

それに、古本屋には新しい本を売っているふつうの本屋にはない、特別な楽しみがありました。お金がなかった学生時代、安いというだけでも大きな魅力でしたが、もう世間からは忘れられ、普通の本屋には置かれていないような本と出会えるのが何よりも楽しみでした。私にとって忘れられない一冊となったのも、そうした古い本でした。

ある日いつものように、神田の古本屋街をぶらついていると、その本が目飛びこんできました。岸本英夫という人が書いた『死を見つめる心』という小さな本です。私がなぜ、その本を手にとったのか、よく分かりません。死とは何かというような関心が特にあったわけではありませんから、その本が目にとまり、手に取ったことは偶然であるようにも思えます。でも私にとって、この本と出会ったことは、大げさな言い方をすれば、運命的なものでした。

岸本英夫という人は、日本が生んだ宗教学者のなかで最も重要な人物の一人です。その

人がまだ大学に在職中、正確にはアメリカに研究留学していたときに癌を発病し、残された時間が限られていることを宣告され、そこからまさに、死を見つめながら生きる日々が始まります。この本は死を切実な問題として突きつけられた一人の人間が書いたエッセーでありながら、それと同時に、宗教学者として生きる、その誠実な生き方を見せてくれるものでもありました。

当時、宗教学という学問は今よりずっとマイナーな学問でした。そのせいもあって、そのころからすでに宗教を対象として、実証的な研究をしてみたいという気持ちはあったのですが、私にはどうすればいいかまったくといっていいほどわかっていませんでした。そのときにこの本は、私が向かうべきなのは宗教学なのだと教えてくれたのです。この本を読み終わったとき、学生時代にありがちな、自分のやりたいことがはっきりと分からない、苛立ちにも似たあのもやもやとした気持ちが、一挙に晴れたことを覚えています。

すべての人がそんないいタイミングで、一冊の本とめぐり会えるとは限りません。しかし本屋であれ、図書館であれ、本の近くに身を置いて、数多くの本を手に取り、本が伝えようとしているメッセージにアンテナを張っていることは決して損にはならないはずです。



私の心に残る図書館

本学外国語学部教授 渡邊 啓貴

私の図書館に関する最初の記憶は、小学生の低学年のころのことである。当時私の通っていた小学校の中では図書館が最も明るい場所だった。教室とは違った白い丸いテーブルやデザインに少し工夫が凝らされた椅子がちょっとしたサロンのように配置してあった。そこは、いかにも機能一辺倒の教室とは違う雰囲気だった。私はそこに行く度に、自分がすでにひとかどの大人になったような気持ちになって、入り口正面の書架の下の段に置かれていた偉人伝のシリーズを読み始めた。ベートーベンの命日が自分の誕生日と同じことを知って、何か自分も広い世界につながっているような気分になったのもその図書館だった。

その後、私は決して図書館のよき利用者ではなかった。私に居心地のよさを感じさせてくれる図書館はなかった。大学生になって、西ヶ原キャンパス時代の本校の図書館を始めて訪れたときには、かなりショックだった。これは私の頭の中では図書館とは到底いえない。しかし、しばらくするとそれも外語らしいと思うようになり、本の借り出しは余りしなかったが、三年生の後半ぐらいからは自習室に毎日のように陣取るようになった。新キャンパスの図書館は近代的ですばらしいが、今となっては西ヶ原の懐かしい思い出のひとつである。

大学生のころ、短期滞在で訪れたパリの国立図書館は、その意味では私の頭の中で、これこそ図書館の中の図書館だった。東洋人のわれわれには少し暗い、昔ながらのスタンドと年代もののデスク、高いドームのような天井の天辺までも届きそうな書架を埋め尽くした万卷の書物——すべてが歴史とともに静かに眠る知の秘境への誘いだった。

その後、大学院生として留学したときのパ

リ大学ソルボンヌ校舎の図書館のイメージはその延長にあった。そして、二年半の留学生活の間、議会図書館、外務省外交文書閲覧室、パリ政治学院の現代史資料センターなどが私の活動場所となった。

当時パリ郊外のヴェルサイユ宮殿にあった議会の記録文書館は私の留学時代のよき思い出の場所である。宮殿の正門から左手には渡り廊下を通っていくと広大な公務員のアパートとなっている。宮殿そのものにつながる建物である。中庭を挟んだその手前の部分に当時、第二次大戦以前の議会の膨大な記録が未整理のまま保管されていた。担当責任者は昼間からワインを煽り、仕事らしい仕事をしているようには見えなかったパリ政治学院出身の官僚だったが、私とはよく話した。彼の自慢は、自分の職場がヴェルサイユ宮殿であることと宮殿そのものに住んでいることだった。時折訪れた元社会党議員は、ドゴールとともにドーバーを渡ったレジスタンスの歴戦の勇士で、私にいろんなことを語ってくれた。

そこでの作業は孤独だったが楽しかった。第二次大戦への足音が次第に高まっていく当時の議会の鬼気迫る発言のやり取りは、手動式のタイプライターで議事進行を打ち込んだカーボン紙を通して、眼前の出来事のように私の頭の中で蘇った。堂々たるルイ十四世像の長い影が私の足元の石畳に伸びた冬の夕暮れ時、仕事の充実感とは裏腹に外国生活での取り留めのない寂寥が、冷たい空気とともに、資料の渉猟に疲れて家路に着いた私の心を静かによぎったことを私は忘れない。

パリ政治学院の現代史資料センターには毎日のように通った。すっかり顔見知りになった私は、電話番をし、小さな閲覧室が満席の時には不在のセンター長室のデスクまで使わ

せてもらった。寒い日には、職務時間だというのに職員たちとリキュールまで飲んだ。

最後に、もうひとつ当時大好きだったのが、ポンピドゥーセンターの図書館だった。自由な出入りが可能で、本は直接書架から手にとって見る事ができた。席もまったく自由だが、満席時には床に本や資料を広げて仕事をした。ここではほとんど誰とも口をきかなかった。群衆の中での、文字通り「広場の孤独」だった。しかし、その孤独は自由で開かれた空間と雰囲気によって相殺されて余りがあった。

私は知を通して自由に世界とつながっていたからだ。

私にとって、記憶に残る図書館というのは、垢抜けた備品から始まって、歴史的調度や建造物であり、それにふさわしい、それぞれの場所でのやさしい人たちとの出会いの場であったり、心地よい「孤独」を提供してくれる場所だった。それは、空間や時代を超えて未知の世界への知的興奮を掻き立て、次なる創造へのステップの場所だった。

西ヶ原キャンパス時代の図書館



【外観】

※中央の高い建物が図書館です。



【ロビー】

「地方志と日用類書－上塚氏コレクションから」

本学外国語学部教授 白井 佐知子

今回紹介するコレクションは、今年6月に調布市在住の上塚芳郎氏が本学に寄贈された書籍である。これらの書籍は、上塚氏の祖父の上塚司氏がかつて南満州鉄道株式会社の調査員をされていたときに中国において蒐集されたものであるときく。今回寄贈された書籍は、小説などの文学や書、画に関わるものを除くと35種である。そのほとんどは江蘇、江西、四川、雲南の「地方志」19種を中心とし、旅行記を含めた地理に関わるものである。

中国での歴史資料には、『史記』などの歴史書や『詩経』や『春秋』などのように、古くに書かれ、それが後代に受け継がれてきたものが少なくない。しかし、それらは後代になって印刷出版されたものがほとんどであり、古くに作成されたものそれ自体が現在にまで残されてきたものは、甲骨文字、漢代の木簡や竹簡、唐代の敦煌文書など極めて限られている。しかし、明代中期以降、商業流通の発展にともなって印刷出版業も盛んになるとともに、それまでとは印刷出版が質量ともに大きく変化し、当時書かれたものや印刷されたものが多く残されることとなった。しかし、それでも現存するものには限界がある。そのため、明代までに印刷出版されたもの、あるいは清代乾隆年間(1736～1795)以前に印刷出版された書籍は中国の多くの図書館で「善本」すなわち貴重本として、それ以降のものとは区別して保管されている。勿論、歴史研究を行ううえでは、いつの時代に印刷されたものであろうとも資料としての価値に基本的には変わりがあるわけではない。しかし、後代に印刷出版されたものには手が加わっている可能性もあり、全く無関係というわけでもない。今回上塚氏から寄贈された書籍の中で「善本」に属するものすべて揃っているものは、以

下に紹介する「地方志」の『雲南府志』、『廬山志』と「日用類書」の『示我周行』である。但し、乾隆年間以降であり「善本」には入らないとはいえ、光緒年間(1875～1908)にさきだつ嘉慶(1796～1820)、道光(1821～1850)、咸豊(1851～1861)、同治年間(1862～1874)に印刷出版された書籍もけっして軽視することはできない。それは19世紀半ば咸豊年間から同治年間にかけて起きた太平天国の乱によって蹂躪された長江以南の下流域(この地域は商工業と文化の中心であった)では多くの書籍や文書が失われ、また出版も減少していたからである。

さらに言えば、所謂「善本」や同治年間以前に印刷刊行されたものでなくても、日本の他の図書館に所蔵されていないものは貴重である。そればかりか、東洋文庫、東京大学東洋文化研究所、京都大学人文科学研究所、国会図書館などの図書館が所蔵しているものであっても、原本を入手することが現在では不可能である書籍は貴重であるといえる。筆者の経験からいえば、北京や上海などの古書店ではかつて清代に印刷刊行された書籍が売られていたが、今日では古書店で売られている線装本の形をとっているものも、そのほとんどすべてが最近作成された影印本である。その意味で今回寄贈された書籍は貴重である。なお、本コレクションの詳細な目録と内容は、紙幅の関係からここに記すことはできないため、ここでは今回寄贈された書籍のうち、「地方志」数種と「日用類書」である『示我周行』について紹介したい。

中国では、上は省から下は郷、鎮、村に至るまで各地方で「地方志」が編纂された。今回寄贈された「地方志」のうち最も編纂年度が古いものは、康熙三十五年(1696)に編纂刊

行された張毓碧撰『雲南府志』全二十五巻である。この『雲南府志』は、東洋文庫と京都大学人文科学研究所も所蔵しているが、京都大学のものは中華民国の刊本である。康熙五十八年(1719)重訂『廬山志』全十五巻も京都大学人文科学研究所が所蔵している。また、道光二十九年(1849)刊『崋眉山志』全十八巻は、所蔵している日本の機関は見出すことができなかった。さらに、乾隆十八年(1753)重修『南嶽志』全六冊は、序、巻之一、巻之八しかなく、京都大学人文科学研究所に類似した名称の書があるが、珍しいものである。

「日用類書」とは、現代日本でいえば「時刻表」、「旅行ガイド」、「冠婚葬祭入門」、「家庭の医学」、「高嶋易断」、「方位学」、「〇〇便利帳」から、「訴訟文書の書き方」などの内容をすべて、あるいは一部を記した書である。勿論、現代中国においてもこうした類の書物は頻繁に出版されている。これらの「日用類書」のうち、商業や科挙受験のために、或いは官僚として外地へ赴く者のためのいわばガイド・ブックの類、またそうした内容を含んだ類がある。これらを現在「商業書」と称している。現在存在が確認されているもののうち最も古いものは、明代隆慶四年(1570)刊、(新安休寧約山)黄汧纂、(姑蘇南壕)呉岫校正『一統路程圖記』(又名『圖注水陸路程圖』、『新刻水陸路程便覽』、『擇日便覽』二巻、『補録』一巻、『占驗書』とともに、江湖散人『新刻士商必要』に収録。)全八巻である。

これらの「商業書」は、外地へ赴く者のための書であるから、必ずある地点からある地点への路程が示されている。これらの路程の系統は、①北京・南京を起点とするもの、②徽州を起点とするもの、③福建を起点とするものの三つに分類することができる。これらの書の内容構成は一様ではない。例えば今回のコレクションの一つ『示我周行』の上集には、江南省城すなわち南京から北京の路程を軸として、山西、浙江、河南、山東、陝西、湖廣(湖南・湖北)、福建、廣東、廣西、四川、雲南、貴州の各省城(省政府所在地)から最終

的に北京に至る道筋が記されており、中集には、明清時代の経済の中心地江蘇省蘇州から安徽省徽州までと、兩淮の塩の積み出し地である江蘇省儀眞県から徽州までの路程、徽州から金華府など浙江省各地への路程などが記されている。

『示我周行』には、水路・陸路の路程が記載されているだけであるが、例えば、明代天啓六年(1626)刊『新安原板士商類要』には、路程のほか、「客商規畧」など商人のための合計十一項目が、「各省王府」など官僚のための合計十四項目や「乾坤定位」、「人倫三教」など一般必要知識や道徳合計三十三項目が記されている。これら「日用類書」は、戦前から戦中にかけて日本人が積極的に収集したものの一つである。それは研究上の関心はもとより、中国大陆への実質的統治拡大を目指した日本にとって、当地の人々の風俗習慣についてより多くの情報を得る必要があったためにほかならない。

前述したように、本コレクションは地理に関わるものがほとんどであるが、『示我周行』および「地方志」のほかに、光緒刊『水道提要』全二十八巻、光緒刊『行川必要』全一冊、光緒刊『峽江救世船志』全一冊、光緒刊『崋眉圖説』全二冊、中華民国刊『滇南名勝圖』、光緒校刊『乾隆府廳州縣圖志』全五十巻、同治刊『海道圖説附長江』十五巻・附巻(欠本あり)、光緒刊『廣湖南攷古略』全三十巻、光緒刊『讀史方輿紀要』百三十巻、宣統(1909～1911)刊『鈍齋東游日記』一冊、中華民国刊『東游紀略』のほか、『雲南叢書』全十六冊が含まれている。

編集注

ご紹介いただきました資料は平成18年度からの利用開始を目指し、目録登録作業を行っております。

また今回の貴重書展示会において資料の一部を公開する予定です。展示会に関する詳細は次頁のお知らせをご覧ください。

図書館からのお知らせ

図書館講演会並びに貴重書展示会のお知らせ

附属図書館では、平成12年度から公開講演会を図書館事業の一環として行っております。今年は、作家の奥泉 光氏をお招きして、下記の要領で行います。また、同時期に中国語図書資料による貴重書展示会も開催いたします。多数の皆様のご来場をお待ちしております。

<講演会>

テーマ：『読むことの創造性』

講演者：奥泉 光氏

(おくいずみ ひかる 作家、第110回芥川賞受賞)

日 時：平成17年10月26日(水)

16時30分～18時00分

会 場：東京外国語大学 研究講義棟1階 115教室

<貴重書展示会>

テーマ：『中国大陆を旅する

—清代の地方志、圖、旅行記と日用類書』

日 時：平成17年10月24日(月)～11月22日(火)

会 場：東京外国語大学 附属図書館

2階貴重書展示コーナー

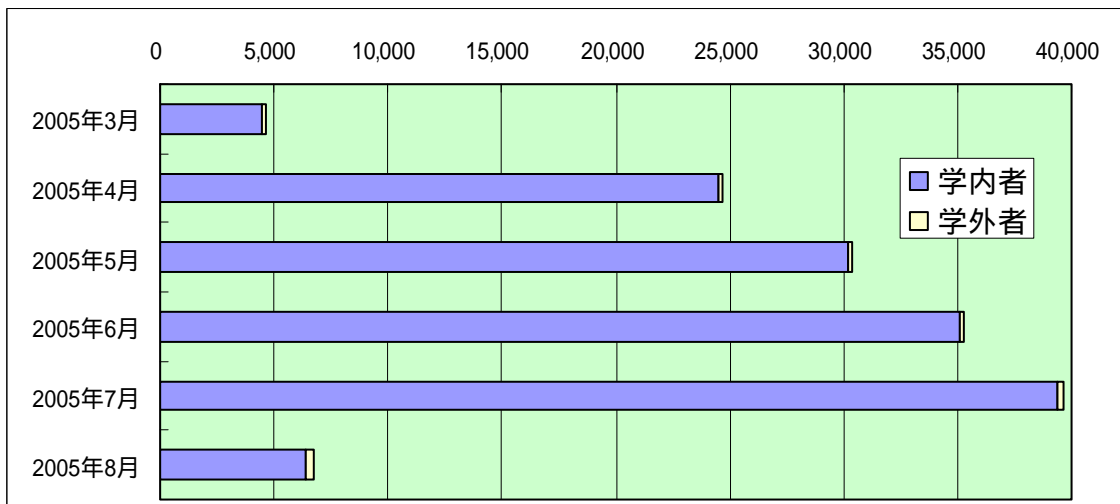


平成17年度前期図書館活動日誌

- 4月 1日 EUIJ 図書館相互利用に関する協定書調印
GeNii (NII 学術コンテンツ・ポータル) の提供開始
LexisNexis の提供開始
- 4月 8日 入学式(館報「カスタリア」等配布)
- 4月12日 図書館オリエンテーション(全5回 ～4月18日)
- 4月15日 国立大学図書館協会東京地区協会総会2名参加(於 東京海洋大学)
- 4月20日 利用者ガイダンス(全6回 ～4月28日)
- 5月 2日 国立情報学研究所遡及入力事業による「アラビア文字資料」遡及入力開始
- 5月30日 情報検索ガイダンス(全4回 ～6月2日)
- 6月 8日 平成17年度第1回図書館委員会
- 6月21日 平成17年度情報リテラシー科目附属図書館担当分「情報検索講義・演習」
(6月23日、28日、30日の4日間)
- 6月29日 平成17年度第1回選書委員会
- 6月30日 第52回国立大学図書館協会総会2名参加(於 名古屋大学)
- 7月 1日 附属図書館事務部を情報図書館課に改組
- 7月27日 平成17年度第2回選書委員会
- 8月31日 国立情報学研究所目録システム講習会(図書コース)講師1名派遣
(於 国立情報学研究所 ～9月2日)
- 9月18日 本学21世紀COE「史資料ハブ地域文化研究拠点」史資料保存・共有・情報化事業
により、オランダ・北欧に2名派遣(～9月26日)

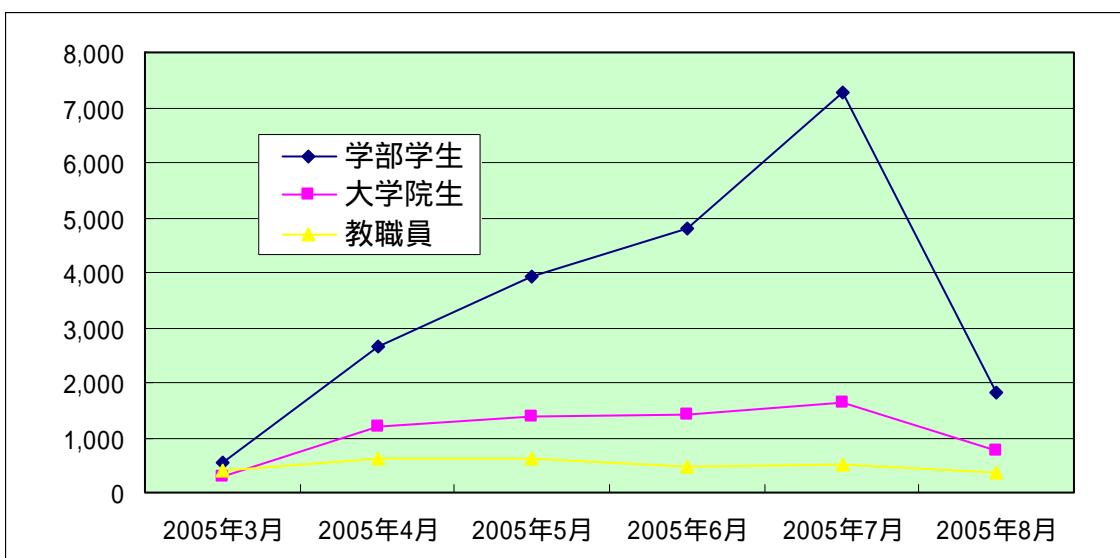
図書館統計

月別入館者数統計



	2005 年 3 月	2005 年 4 月	2005 年 5 月	2005 年 6 月	2005 年 7 月	2005 年 8 月
学内者	4,468	24,494	30,237	35,113	39,399	6,399
学外者	132	186	163	195	252	323
合 計	4,600	24,680	30,400	35,308	39,651	6,722

貸出冊数統計



	2005 年 3 月	2005 年 4 月	2005 年 5 月	2005 年 6 月	2005 年 7 月	2005 年 8 月
学部学生	541	2,639	3,929	4,809	7,288	1,822
大学院生	295	1,190	1,397	1,403	1,644	762
教 職 員	404	614	619	485	502	377
合 計	1,240	4,443	5,945	6,697	9,434	2,961

編集後記

●編集スケジュールはいつも余裕を持って設定していますが、発行間際はどうしてもバタバタしてしまいます。原稿が締め切りまでに集まらないことも一因ですが、より良い館報になるように、集まった原稿を編集委員が何度もチェックしているからでもあります。そうして出来上がった館報を、より多くの方々に読んでいただければと願っています。(高杉)

●今号では、9月1日付の図書館長の交替に伴い、富盛前館長と亀山新館長のお二人に退任と就任にあたってのご挨拶をいただきました。学生さん方の中には、普段厳しい先生方の新しい一面を発見したとを感じる方もいらっしゃるのではないのでしょうか。編集者自身も、大学紛争を描いた本の中で登場人物として恩師のお名前を発見し、先生自身も何もおっしゃらなかった先生の過去に出会った気がしたことがあります。(大和)

●世の中は世代交代が進んでおりますが、図書館も改組し、館長が交代されました。年度末にはベテランの方の退職も控えております。新しいことに挑戦するとともに、地道に積み上げてきた業績を引き継ぐことも図書館にとっては大切な仕事ですので、より一層、業務に取り組んでいきたいと思っております。(千葉)

●学生時代に ERIC などのデータベースを利用したときを思い出しました。当時は、コマンドラインで入力をし、1回の利用料が千円くらい、さらにロサンゼルスまでの国際電話代が掛かりました。図書館で提供しているオンライン情報検索サービスは、すべて無料で利用できます。是非ご利用ください。(坂牧)

Castalia : 東京外国語大学附属図書館報 第10号 : インターネット版 第5号

<http://www.tufs.ac.jp/common/library/gaiyo/kanpo/castalia-10.pdf>

2005年9月30日発行

発行 行 : 東京外国語大学附属図書館 〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1

TEL / FAX : 042-330-5193 (TEL) 042-330-5199 (FAX)

ホームページ : <http://www.tufs.ac.jp/common/library/index-j.html>

編集発行人 木村優

編集長 高杉泰穂

編集委員 大和加寿子

千葉亜紀子

坂牧一博

